

京都福音特別集会 (2)

神讚美

——ローマ書第8章26節～9章3節——

1994年5月8日

小池辰雄

詩「視よ此の人ぞ！」 全存在的な自己否定 ビルマの豎琴 本ものがまん中に光っている 聖書は神の響き キリストの中で動いているのが神讚美 お互いに仲良くしていることが神讚美 満月を抱く三日月 私を受けるために結構なこと 詩「主のみわざ慕いて」 棄身の愛 新しき歌を歌わん 祈り

【ロマ8】

26 斯くのごとく御霊も我らの弱を助けたもう。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難き嘆きをもて執成し給う。27 また人の心を極めたもう者は御霊の念をも知りたもう。御霊は神の御意に適いて聖徒のために執成し給えばなり。28 神を愛する者、すなわち御旨によりて召されたる者の為には、凡てのこと相働きて益となるを我らは知る。29 神は予じめ知りたもう者を御子の像に象らせんと予め定め給えり。これ多くの兄弟のうち、御子を嫡子たらせんが為なり。30 又その予め定めたる者を召し、召したる者を義とし、義としたる者には光栄を得させ給う。

31 然れば此等の事につきて何をか言わん、神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。32 己の御子を惜まらずして我ら衆のために付し給いし者は、なかか之にそえて万物を我らに賜わざらんや。33 誰か神の選び給える者を訴えん、神は之を義とし給う。34 誰か之を罪に定めん、死にて甦えり給いしキリスト・イエスは神の右に在して、我らの為に執成し給うなり。35 我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難か、苦難か、迫害か、飢か、裸か、危険か、剣か。36 録して『汝のために我らは、終日、殺されて屠らるべき羊の如きものと為られたり』とあるが如し。37 然れど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したもう者に頼り、勝ち得て余あり。38 われ確く信ず、死も生命も、御使も、権威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、39 高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。

【ロマ9:1-3】



1 我キリストに在りて真をいい虚偽を言わず、² 我に大なる憂あることと
 心に絶えざる痛あることとを我が良心も聖霊によりて証す。³ もし我が兄弟
 わが骨肉の為にならんには、我みずから誼わられてキリストに棄てらるるも亦
 ねがう所なり。

● 詩「視よ此の人ぞ！」

ベートーヴェンはこの世を去る十何年前に耳がつんぼになった。その運命に彼は一度、
 ドナウ河に身を投じて自殺しようと思つた。音楽家で耳が聞こえなくなつたらどうにもな
 らない。ところが、本当の耳はこの耳ではない。魂の耳なんです。ベートーヴェンはその
 魂の耳をもつようになった。それから凄い音楽が、楽曲が生まれてきた。つんぼになつて
 から本当の作曲家になった。天来のものはどん底に立つと凄いことになる。もちろん、天
 来のものを受けとらなかつたらダメです。

これは私が1985年2月7日に作つた歌です。（独唱）

召団讃歌D2「視よ此の人ぞ！」

（1985年2月7日作、作詞作曲 小池辰雄）

- | | | | |
|---|------------|-----|--------|
| 1 | ああベートーヴェン！ | 生涯の | 誰か知る |
| | 彼の涙を | | 遂に無し |
| | 「第二の我」は | | 宿なりし |
| | この世は仮りの | | 音の無き |
| 2 | 音はひびけど | | 辿りつつ |
| | 旅路を独り | | 眼にて聴き |
| | 森と小川を | | 奏でたり |
| | 「パストラル」を | | 孤独なる |
| 3 | 見よ此の人ぞ！ | | 巨匠なり |
| | 音の芸術の | | つき貫けて |
| | なやみ苦しむ | | 「第九」なり |
| | 世に投ぜしは | | その心 |
| 4 | 孤独なれども | | みなぎりて |
| | 力と愛に | | 胸をうつ |
| | あらゆる人の | | かぎりなし |
| | 音曲の波は | | |

ベートーヴェンの音楽はいつまでも全世界の人たちの魂に光を与えている。ただその時
 代に業績を残したくらいではない。本ものというものはその時代には本当は余り受けとら
 れない。時が経つにつれて、その真価があらわれてくる。人類の歴史の終りまでベートーヴェ



ンの音楽は消えない。「第九シンフォニー」はその天来の響きだ。私はこういう本ものには感激する。

「本ものは後世にまで失われずにいつまでも留まっている」

とはゲーテの言葉です。とにかく、日本には偉大な芸術家が出てこないのは、結局そういう世界を持たないからです。「キリスト教」なんて、教にしているからダメなんだ。キリストそのものの光、生命、愛です。私は、

「キリストさま、イエスさま！」

と一言、魂の中で叫べば、もうそれが一切です。あとは言葉は要らない。全身熱くなる。

我々は、どんな事があっても、行き詰まりはない。神さまは必ず別な道を、もっと素晴らしい道を通らせてくださる。ダンテが太陽を見て向こうの山に登ろうとしたら、獣が出てきた。豹と狼と獅子、この三つの獣はエレミヤ記に書いてありますが、ある三つの悪徳を代表する。それに打ち勝つことができないので、仕方がないから、地獄を通って行った。地獄、煉獄、天国へという、あの三界の旅というのは人間の本当の道なんです。

●全存在的な自己否定

パウロは何と言いましたか、

「我は罪びとの首なり」^{かしら}

と言いました。この自覚です。

「私はしょうがない奴の最も悪い奴だ」

と。その「罪びとの首」がもの凄くキリストの証者になってしまった。自分を

「いくらかい」

なんて思っているうちは、いつまでたってもダメです。徹底的に自己否定です。これは頭ではない。全存在的な否定です。

「罪びとの首」とパウロが言いましたが、実はキリストが「罪びとの首」になってくださった。内村鑑三先生が、

「パウロは罪びとの首と言った。私も罪びとの首だ」

と書いています。私はそれを読んで、

「三番目が小池だ、私が三番目の罪びとの首だ」

と、かつて本当に思ったことがある。どん底です。ところが、どん底かと思ったら、実はもうひとつどん底があった。それはイエス・キリストです。十字架上のキリストが皆に代わって、十字架に己をほふった。

「私は自分で十字架に架かった。悪者どもに架けられたのではない」と。これが贖罪の、罪を贖うところの十字架のキリストの姿です。

「お前たちの罪は全部ここに、贖いの十字架でほふられてしまった」



と。私たちは無条件に平伏して

「ありがとうございます」

と、その他にない。一番深い祈りは感謝なんです、お願いではない。救は既に来ている。

「救ってください」

ではない。

「救われておりました。ありがとうございます」

と。どこに救われていたか、根拠はどこか。キリストの十字架と復活のキリスト、聖霊のキリストです。全部向こう側からきている。我々は圧倒されている。キリストに圧倒されて生きています。

「人間の側のお願いや祈りがどうのこうの」

なんて言っているうちは、まだダメなんです。救は既に完了している。現在完了の連続でいつているわけです。だから、パウロが言ったでしょ、

「²²われキリストと共に十字架せられたり、もはや我生くるにあらず、

その次に何と言ったかというと、

キリストわがうちにありて生きたもうなり」（ガラテヤ2・20）

「御霊のキリストわがうちにありて生きたもう」

と。十字架と聖霊は離すことができないことをパウロ自身が告白している。だから、パウロはあのような使徒にさせられてしまった。新約聖書からパウロ書翰をぬかしたら、骨がなくなってしまう。福音書はキリストそのものですから、特別なものでもありません。

●ビルマの豎琴

それでは、今日は少し、歌の世界の神讚美のことをお話しします。『ビルマの豎琴』という本がある。竹山道雄さんという、私の3、4年先輩の人が書いた本です。

第二次戦争の時に英軍とビルマで戦って、日本は破れて捕虜になってしまふ。水島という上等兵は歌が好きで、自分で作った豎琴を弾いて皆と一緒に歌ったりした。その好きな歌が「埴生の宿」や「庭の千草」という歌です。これを水島の弾く豎琴の音に合わせて日本兵が歌った。そうしたら、イギリスの兵隊がそれを聞いて、向こうで同じ節の英語の歌を歌い出した。そして仲良くなってしまう。イギリスはもちろん勝つたので、日本兵は捕虜になる状況だったけれども、歌を歌っていたら、故里が懐かしいというわけで、もう敵味方がなくなってしまうた。（独唱）

『埴生の宿』（里見義 作詞）

埴生はにゆうの宿も

わが宿

玉たまのよそおい

つらやまじ

長閑のしかなりや

春はるの空



花はあるじ 鳥は友
 おおわが宿よ
 楽しも たのもじや

これは故里を恋慕うところの歌で、英語の『ホーム・スイート・ホーム』の歌です。

HOME, SWEET HOME

Mid pleasures and palaces

Though we may roam,

Be it ever so humble

There's no place like home!

A charm from the skies seems

To hallow us there,

Which seek through the world,

Is not met with elsewhere,

Home! Home, sweet, sweet home!

There's no place like home!

There's no place like home.

(対訳)

様々な楽しみや、素晴らしい家々に

めぐり逢うことがあっても

質素なたたずまいの

我が家より素晴らしい所はない。

美しい空は私達の心を

そこへいざなう

世界中、たずねても

決して出会うことのない

我が家、懐かしきわが家

我が家より素晴らしいものはない

我が家より素晴らしいものはない。

日本軍が『殖生の宿』を歌っていたら、向こうのイギリスの兵隊たちが『ホーム・スイート・ホーム』を歌いだしてしまった。歌がお互いの間を、敵味方を越えさせて、本当に人間としての愛の和にしてみました。そして、やってきてお互いに握手して抱き合ったという話です。愛の歌が、故里の歌が、あるいは神讚美の歌が、そういうようにして人の和をつくる。歌というものは、偉大な音楽は、世界の人たちを本当に結ぶ。

そういう意味において、ベートーヴェンの音楽というのは本当に大変な力をもったもの



です。「歌いつつ歩まん」という歌があります。我々は人生を、魂で本当に歌いながら、神・キリストを歌いながら、人への愛を歌いながら歩く。

「我（神）を愛することと人を愛することは同じことだ」

とキリストは言われましたが、そういうように、歌というものがいかに大事な要素であるかということですが。ただ

「うまく歌うかまずいか」

ということではない。うまいまじいではない。心をこめて本当に歌って、お互いに親しくなる。

水島上等兵は武器はみな捨ててしまつて、ビルマの服を着てビルマ人と親しくなつて帰つてこない。

「水島、帰つてこい」

と言つても、

「私は帰りません」

と。ということは、戦場でいろいろな日本兵の死体を見た、惨憺たる有り様を見て、

「もうこれはいかん。本当の平和をもたらさなければいかん。人間が殺し合うのは

とんでもない話だ」

と。それで、彼は帰つてこないで、とうとうビルマの托鉢僧になる。そして、戦死した人々を本当に心から弔う。その魂をねぎらうわけです。

上からきたところの、その人の中に燃えてきたところの愛というものはやはり最大の力だ。愛は最大の力です。これには本当は降参しなければいかん。武器ではない。単なる筆の力でもない。魂の愛の力です。これは相手を救いあげる。

●本ものがまん中に光っている

キリストが正にそうです。

「私は罪びとを招かんとて来たれり」

という。パウロは、

「私は一番悪い者だ。罪びとの首だ」

と言いました。内村鑑三先生が「私も罪びとの首だ」と言った。体裁で言っているのではない。本当に言っている。親鸞もそうなんだ。

「弥陀の五劫の大音信はただ親鸞一人の為であつた。私を救う為のお釈迦さんの教えであつた」

と。「唯だ親鸞のためにのみ」という。『歎異抄』にある言葉です。

「聖人の常の仰せには、彌陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」



「私一人を救うための弥陀の五劫思惟であった」
と。これも、人のことなんか思っていない。

「このしようがない者を救わんために弥陀の五劫思惟の願いがあった、本願があった」

と。内村鑑三先生が、

「私みたいなのが救われた。だから万人は救われる。こんな者が救われたから、救われたい人はいない」

と言った。さすがは内村先生らしいね、いろいろ圭角けいかくの強い人で凸凹しているから。

大体、自分をぶちまけている人は——パウロもキリストに全身で反対してクリスチャンを迫害していた——そんなのがひっくり返ると、これまた凄いことになる。

パウロが全くそうだった。キリストを信ずる者を迫害して、ダマスコ途上で聖霊のキリストにひっくり返された。上から光が来てぶつ倒された。人によっていろいろです。非常に烈しい受けとり方する人もあれば、水がしみ込んでいくように受けとる人もある。受けとり方は人によっていろいろだ。

とにかく、本ものにならないければダメです。いい加減ではダメ。「本もの」というのは、まん中に光っているものがある。回りの形は凸凹でいろいろなものがあるけれども、まん中にひとつ光ったものがある。これがあれば、この人は本ものなんです。全体の形が整っていたってダメ。この中核は誰もこれを奪うことができない、そういう中核が来ている。

我々にとっては御霊です。これは本当の芯だ。躓いても転んでもひっくり返っても、そういう人は必ず前進していく。パウロがそうだった。イエス・キリストは最も素晴らしいそういうひと。大変な霊止ひとだね、キリストというひとは。福音書を読むと参ってしまう。

「湖の上を渡ってきた」

なんて、その一言でもう参ってしまう。ああいう所を読むときに、その湖の上を渡っているキリストの中に入らなければダメですよ。降参して、その中に入る。なんだから知らなければいけません、凄い力がくる。

●聖書は神の響き

私はこの『ビルマの竖琴』という本を読んで感嘆した。水島上等兵たちが歌っていたら、相手のイギリスの兵隊たちが攻めるのをやめて、仲良くなってしまう。お互いにもう戦争はやめだと、武器を捨てて握手して抱き合った。歌が武器よりも強かった。そのように、歌の世界は、音楽の世界はいかに力を持ったものであるかということですよ。

今度は、聖書は神の響きだ。意味ではない。聖書は神の畏ろしい響きの書です。神の根源語が響いている。ヘブライ語でもギリシア語でも日本語でもない。

「この日」とばをかの日につたえ、このよ知識をかの夜におくる。」（詩篇19・2）



というのはそういう世界、

「闇の夜に鳴かぬ鳥の声をきく」

世界、本当の神秘の現実です。何でも、本を読んで意味を詮索しているうちはダメです、その著者の魂の響きを受けとつていかなければ。いい加減な、頭で書いている本なんかは、読んでいても嫌になってしまふ、読む気がしない。

「これは魂で書いているな」

と、読んでいれば分かる。いわゆる説明的な本はダメです、告白でなければ。ゲーテは、「わが文学は全部、告白である」

と言った。さすがはゲーテだ。体験ならざる言葉は一つもないと。頭ででつちあげたものなんか彼は書かない。ああいうのは本当の文豪だ。ゲーテとダンテ、詩人ではこの二人。

そして、水島はビルマへ行つて帰つてこない。戦死者たちを弔うところのビルマの坊さんになってしまった。この人たちをおいて私は日本には帰れないと。本当の愛の世界はやはり凄い。愛は最大の力です。愛というのは相手を救い上げる。救い上げる力をもったものが愛です。

キリストの愛をみてごらんさい。全部救いあげている。死人まで甦らせている。棺桶に手を置いて、

「起きよー！」

と言えば、青年が棺桶の中から起きてくる。これは大変なひとだ。

「ラザロよ、出でよー！」

と言えば、出てくるんだから。死んでから何日も経つていても、そんなことはキリストは平気なんだ。とにかく、聖書の現実は凄いから、御霊の光でもつてその中に読み入らなければダメです、読入しなければ。

●キリストの中で動いているのが神讚美

ローマ書8章を開いてください。

26 斯くのごとく御霊も我らの弱きを助けたもう。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難き嘆きをもて執成し給う。27 また人の心を極めたもう者は御霊の念をも知りたもう。御霊は神の御意に適いて聖徒のために執成し給えばなり。

コリント前書13章は愛の讃歌だけれども、ローマ書8章は聖霊の讃歌です。パウロが8章でいかに聖霊のことを言っているか、その土台は7章にある。十字架のことです。十字架と聖霊は離すわけにいかない。十字架と言えば、聖霊がその後からグワァーツと来ている。聖霊と言えば、その土台に十字架が見える。そういう取り方をしていないとね。どちらの一言を言つても、ちゃんとこの二つが出てくる。



パウロが書翰の中で、「神は…」と言つても、パウロにとっては神の奥にちゃんとキリストがいる。パウロにとっては、キリストと神さまを離すわけにはいかない。

「ここにはキリストがないじゃないか」

なんて、そうではない。隠れているキリストをパウロはちゃんと自覚して書いている。神さまはキリストぬきにして現れなかった。キリストはまた神さまなしには在り得ない。神一切のひとだから。

そういうような現実をもたなければ、「神讚美」なんて言つたつて空しい。キリストの愛を頂いて、愛のキリストの中に入って、そうして動いているのが神讚美なんです。その姿が神讚美です。自分自身が讚美歌なんです。別に歌う必要がない。

「讚美歌を忘れました」

「結構です、あなた自身が讚美歌でしょ」

と。そういうような、いわゆる言葉の概念をのりこえた現実です。

ヨハネ伝の一番先に、

「^{はじめ}太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。」（ヨハネ一：一）

とある。そうしたら、ゲエテが『ファウスト』の中で

「初めに行為（タート）があつた」

と訳し直した。

「言ではない。初めに行為があつた」

と。これは本当だ。行じなければものを言わない人が本当の人です。

「まず言つてからそれから」

というのはダメなんです。行為そのものがその人の表現だから、それが本当の言なんだ。口から出るのは、それからあとのはなし。だから、さすがはゲエテは

「初めに行為あり」

とファウストをして直させた。

「言葉ではない。行為をしてからものを言う。その人の言葉の奥には実は行為があつた」

と、こういうわけだ。人助けの愛の行為があつた。だから、告白するんです。説明しているのではない。

讚美歌で「何々したまえ」というのがあるが、私は余り好きでない。なぜ、「したまえ」なんて言っているか。「したもう」です。

「そうしてくださっているのだ」

と、それが根底になかったら、「したまえ」はダメなんです。

「私だよ。私はすでにやっているではないか」

とキリストの方から言つてらつしやるんだ。お願いばかりしているような讚美歌はダメで



す。もつと現実認識をしないとね、神の恵の力の現実認識を。だから、

「私は何もお願いすることがなくなりました」

というのが本当なんだ。「ありがとうございます」だけでいい。

「私の知らない事をたくさんやってくださいまして、ありがとうございます。すみません」

と。「すみません」というのは日本語のおもしろい言葉だ。それは感謝の気持だけれど、「すみません」という言葉は他に恐らくないね。まず感謝。神・キリストの光、救、生命に感謝する。

「しょうがない者をこんなに生かしてくださって、すみません。ありがとうございます。何かしてあなたを現したいと思つています。あなたの所に入ります、どうか入つて来てください」

と、そういうようになってこなくてはね。すると、すぐキリストは、

「私はお前の中にはいるではないか」

「ああ、そうでしたか」

と。そういう心境——単なる心境ではないけれども——そういう現実、これが本当にキリストをいただいている人の現実ではないですか。

●お互いに仲良くしていることが神讚美

お互いの兵隊たちが

「もう戦争なんかよそうではないか」

と、講和条件よりも先に前線の人達が戦争を止めてしまう。本部の方からものを言つてきたら、

「何を言つているか、戦うための戦いではない」

と、逆にやつつけてやる。本当に握手するための、戦いを乗り越えた世界です。内村鑑三は、

「日清戦争は正義の戦争だ」

と言つて、大いにやつていた。ところが今度は、

「私は間違つていた。戦争そのものは罪悪である」

と、日露戦争に対しては反対して、非戦論をとなえた。

「形に現れた最大の罪悪は戦争だ」

と。アメリカのリンカーンも心からの平和の宣言をした。

だから、我々は世界中どこを旅行しても、本当に兄弟姉妹の握手ができる。どこへ行つても楽しいわけだ。

「何か知らないけれども、あの人は不思議な人だなあ」ということにならなくてはね。



「あなた方はキリスト教国ではないですか。何をやってますか、人の品評なんかしてたらダメではないですか」
 と言つてやる。

ふるさとを想う歌を歌つた。そうしたら、向こうの兵隊さんたちが故里を想いだした。心からの歌が勝ち誇つていたイギリスの軍隊をしてもはや戦争を止めさせ、負けている方の日本と握手をさせた。「庭の千草」や「殖生の宿」の歌、そういう歌が本当にお互いに握手させたという。

そういう意味で、我々はそれが本当の神讚美になる。神讚美は、ただ讚美歌を歌うのではなくて、お互いに人間同士が本当に仲良くなるのが、その姿が神讚美の姿です。神讚美というのはそういう間接的な言葉です。それは、

「我を愛するということ、人を愛することとは同じことだ」
 と同じで、お互いが仲良くしていることが神讚美、キリスト讚美です。

●満月を抱く三日月

ローマ書8章にもどります。

32 己の御子を惜まずして我ら衆のために付し給いし者は、^{すべて}などか之にそえて

万物を我らに賜わざらんや。

キリストを我々の救いのために、我々一人ひとりのために棄てた。我々を生かすためにキリストを殺した。けれども、殺しつぱなしではない。これは贖罪の死だから、必ず霊体として甦れる。

「之にそえて万物を我らに賜わざらんや」

とは何ですか。キリストをすらくださつたのに、万物をくださる。何のためにくださるのですか。自然界は全部生命がつながっているということです。この言葉は躓かないでくださいよ。人間と動物と植物と、全部これは生命がつながっている。犬でも猫でも本当に愛すれば決して逆らつてこない。狼ですらそうだ。アッシジのフランチェスコが狼に、

「狼さん、人を食べてはいけません。私がやる食べ物を食べなさい」

と言つたら、狼がなついでしまった。これがやはり愛の世界だ。動物でも植物でも全部、生命のつながりだ。

私は夜の星を見て、地球の上にいるのだけれども、別な星の世界に——どれくらい距離だか知らないが——そこを散歩しているような気持で見える。人間がこんな狭い地球上のことだけ、下ばかり見ていたらダメです、宇宙を庭のようにしなければ。宇宙は太平洋よりかもっと凄い。宇宙的なハートにならないとね。楽しいです。鳥は翼で飛んでいくけれども、我々は魂で飛んでいく。お月さんの所まで行かなくなつて、月の中に入ってしまう。

三日月には、満ちゆく三日月と欠けていく三日月がある。我々は満ちゆく三日月、満ち



ゆく存在にならなければダメです。

「私は三日月です。但し、満月をいただいています」と私は時々言う。

「満月を抱く三日月」

と。あなた方一人ひとりが人生の目的をもって進んでいくときには、満ちゆく月の方です。目的のない生き方をしている人は、欠けていく月で、ダメなんです。満ちゆく月の方は、どんなに雲がかかってきてもいい。雲はいくらでもやってこいと。大丈夫です。皆さんは満ちていくところの月の姿である。聖霊の器はそうです。キリストを抱いていると、

「満ちゆく三日月」

になる。そして誰でもが——何だかは知らないけれども——或る目的に向かって進んでいく。自己目的ではない。神の栄光が現れる目的です。どなたでも神さまの栄光が現れる。

「人生の目的は神の栄光を現すことなり。そのためにはキリストを抱け」

ということ。それが聖霊の世界です。

聖霊というのは、とにかく凄い。聖霊の内容というのは語り切れない。それはあたりまえです。だから、「十字架・聖霊」を念ずるだけで、熱くなつてしまうが、そういうキリストを生きなかつたら、つまらんですよ。なにがクリスチャンかというんだ。観念クリスチャンなんかよりは普通の人間の方がよっぽどいい。観念クリスチャンよりか普通の人間の方がいいよ、あるがままの人の方が。

キリストを生きている者は烈々たる証し人だ。

「我は火を投ぜん為に來たれり」

とある。我々は烈々たる人にされていくわけだ、御霊は火だから。御霊はある時は水とも言う。生命の水、光の火。「水火相容れず」ではなく、水火相容れてしまっている。

●私を受けるために結構なこと

ローマ書8章にもどります。

35我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、患難か、苦難か、迫害か、
飢か、裸か、危険か、剣か。

こんなものは何でも来いと。その中にあつても、

37然れど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したもう者に頼り、勝ち

得て余あり。

と。パウロはやはり凄い。

「このキリストを持つたら、何が来たつて一向大丈夫だ」

と。本当の英雄はキリストを持つている人です、女でも男でも。キリストは羔羊のようなひとで、また、獅子よりも凄い。キリストは、



「恵福なるかな、清き者。悲しむ者は恵福だ」と言っておられる。

「弱くて結構だ。泣いていいよ、本当の歓喜の世界にいられてやるから。弱くていいよ、本当の力を与えるから」

だから、「恵福なるかな」と言っているんだ、キリストは。「それはみな、私を受けるために結構なことだ。何が恵福かというのと、私を受けるためだよ」

ということ。それが恵福、「恵まれたるかな」という言葉です。いわゆる幸福、幸せではない。

38 われ確く信ず、死も生命も、御使も、権威ある者も、今ある者も後あらん者も、力ある者も、39 高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主キリスト・イエスにある神の愛より、我らを離れしむるを得ざることを。

これは熾んなる言葉だ。このパウロの告白にはかなうものはない。パウロはこのようにキリストに捕まえられてしまって、ローマ書を書かざるを得ないわけです。8章は聖霊によるところの讚美です。「キリストの愛より」とは「愛なるキリストより」ということです。ロマ書9章です。

1 我キリストに在りて真をいい虚偽を言わず、2 我に大なる憂いあることと心に絶えざる痛みあることを我が良心も聖霊によりて証す。3 もし我が兄弟わが骨肉の為にならんには、我みずから詛わられてキリストに棄てらるるも亦ねがう所なり。

「自分はどんなに棄てられたつていい、彼等が救われれば」というわけだ。これが棄身の愛です。

新約聖書はむだがない。ひとつもいい加減なことを言っていない。聖書を食べてくださいよ、本当に親しんでください。

旧約では預言書だ。旧約でどこを選ぶかというと、私はイザヤ書です、詩篇ではない。イザヤ書というのは、上からきている神さまの言葉を伝えている。こつち側から言っているのではない。イザヤ書を見てごらん、まず一番先に何と書いてあるかというと、

「2 天よぎけ地よ耳をかたづけよ、エホバの語りたもう言あり、曰く……」（イザヤ1:2）

とある。まず天地に向かって言っている。この言葉は凄い。イザヤ書には親しんでください。エレミヤは心の世界。イザヤは霊の世界。雅歌書は愛の世界だ。旧約は預言書が中心、新約は福音書が中心です。旧約の預言者はみな福音書のキリストに向かって言っている。イザヤ書53章なんて凄い。どうしてこんなキリストの預言ができたものかと思う。キリストを霊でもって生きているような者が書いたんだ、そんな感じがする。



もう他の本を読む必要はない、この聖書はケタ違いの本だから。あとは第一流の書。哲学書は要らない。文学の第一流のもの。日本には残念ながら、そういうのがない。漱石を読んでも、藤村を読んでも、蘆花を読んでもダメだ。いわんや、この頃のものなんかは読む気がしない。情けないね。だから、若い人たちは古典を読まなければダメです。漢文でも古典——論語、孟子、老子。老子というのは分量は少ないが凄い。厚みは老子は論語以上です。孔子が

「老子は龍の如し。老子にはかなわない」と言っただけという。

●詩「主のみわざ慕いて」

前に私はこういう讚美歌を作った。（独唱）

召団讚歌B10「主のみわざ慕いて」

（1981年5月7日作、讚美歌331「主にのみ十字架を」の曲で）

1. 主のみわざ慕いて み霊により
- 人のため世のため 力尽くさん
2. 原始なる福音 力に満つ
- 使徒たちの如くに 道を伝えん
3. 無限無量なる この福音
- いついづこにても 語りつたえん
4. この福音を身に つけし我ら
- ひとつにたえざれば 禍わざわいなり
5. 誰しも伝道の 使命ぞある
- 召団の兄弟はら姉妹 大胆なれ！
6. 聖名のためなれば みに在りて
- み名のみ力をば 体現せん
7. 聖名のためなれば 十字架を負い
- アナテマたましひ魂 貫き往かん！

「アナテマ魂」というのは、
「人にけなされても一向差し支えない」

と、そういう魂をいう。「魂」という言葉をひらがなで書くときには「たましひ」と書かなくてはいかん。「たましひ」とはもともと「魂之靈たましひ」という字です。「ひ」「は」「靈」という字ですから。「ひと」とは「靈止ひと」、靈が止まると書く。これが本当の「ひと」なんです。人間は神霊が止まっている存在である。『大言海』という辞典に出ている。

すべて空しいことは止よしたらいい。それが本当に血となり肉となるに価するもの、本当



に人に生命を分かち与えるもの、その他は空しい。ゲートルも言っている。
 「本当に宗教的なものをそこに宿さざるものは空しい」

水島上等兵は豎琴を弾いて、相手のイギリス兵を歌の世界に導いて、平和をもたらせてしまった。一人のそのような歌の魂がお互いに握手させてしまった。この『ビルマの豎琴』という本は楽しい本です。敵味方がなくなつてしまった。そして、

「私はもう帰らない、戦死した人たちを弔うために。この人たちを残して私は日本に帰るわけにいかない」

と。それで坊さんになつて、人救いのためにビルマに残つた。それが本当の愛国者の姿なんです。本当の愛国者はそういうのです。日本を愛するとは、そのような愛の存在にならなければ、本当に日本を愛することにならない。逆説的な存在です。

キリストに在つては、あなた方一人ひとりを通して、その人らしい体現の仕方がある。遠慮なくやつてください。本ものは必ず勝つ。人に認められるか認められないか、そんなことはどうでもいい。パウロも言っている、

「人を相手にするな」

と。人を相手にしないでキリストを相手にしている人が実は本当の意味で人を相手にしていることになる。人を棄てているひとが本当は人を救うひとなんです。

「神の怒は愛の別な表現である」

と。これはルターがそう言っている。ルターというのはいろいろなことを、あなた方が聞いたら笑うようなことを言っている。

「酒と歌と女を愛さないやつは男ではない」

と言っている。半分冗談で、半分本当です。彼はワインが好きだったからね。本ものの言葉というものは、その言葉の奥の世界を掴まえないと、躓きますよ。

● 棄身の愛

キリストを最も愛した女性は誰だね。マグダラのマリヤ、七つの悪鬼を追い出されたあの女性です。最後にやつてきて、ナルドの香油の壺を割って、

「もうこの壺は使わない」

と、全部を頭からキリストに注いだ。そしたら、キリストは何と言つたですか。弟子たちが、

「なぜ、そんなもつたいたいことをするか」

と言つたら、

「何を言っているか。この女は私の葬りのためにやってくれたのだ」

とキリストは言われた。ナルドの香油というのは非常に高価な香油です。しかも、壺を割つてしまつて、



「もう使わない。全部、イエスさま、あなたに注ぎます」

と。これは全身の感謝の表現なんです。何でも全的な行為が大事なんです。いい加減ではダメ。「何分の一」なんてダメです。全的ということ。あとのことを考えない。

「本当の江戸っ子は宵越しの金を使わない」

という言葉がある。

「その日限りだ、明日のことは知らん」

と。とにかく、あなた方とは、話すも聞くも同じことで、同じ世界でやっているから、私は楽しくてしょうがない。こういう集会というのはちよつとないよ。私はお説教なんて大嫌いだ、人に教えているような意識でものを言っているようなのは。全部、告白です。

「汝自身たれ」（ビー・ザイセルフ、ユアセルフ）

という。あなた方お一人ひとりが特殊的存在だから、人真似は要らん。神さまは一人ひとりを通して、掛け替えのない表現の仕方をしていらっしやる。人真似をしたら、自分に対するところの侮辱なんです。

お互いに本当に尊重しながら本当に愛する。「敬愛」という言葉はいい言葉だ。相手を敬し愛する、尊重し愛する。人格を大いに尊重し、そしてお互いに愛する。愛するとは己を棄てることです。

「刎頸ふんけいの交わり」

という言葉ある。あの友だちの為には自分の頸くびが刎きられてもいいと、これを「刎頸ふんけいの交わり」という。それは棄身の愛なんです。本当の友情はそうなんです。生命賭けで友人を愛していく。師弟の関係でもそうだ。親子の関係でも、人間関係は何でもそうだ。究極はそういうことです。キリストの愛はそういう愛でした。

「我ら一人ひとりのために口を棄てたまひし」

と、パウロがちゃんと言っている。だから、パウロもキリストのために棄身になった。「棄身の愛」というのはいい言葉だ。棄身の態勢だ。仕事をするのでも何でもみな棄身だ。

「父ちちの全まきが如く全まかれ」

というキリストの言葉がある。あれはちよつと私は困ってしまった。凄い言葉だ、割引のない言葉だ。「父ちちの全まきが如く全まかれ」なんて、そんなこと誰ができますか。

「父ちちの全まきをいただけ」

ということなんです。

「お前たちはできっこない。だからただ、父ちちの全まきをいただきなさい」

と。ところが、「父ちちの全まさ」というのは、私に言わせると、本当は「全まさ」とは言いたくない。

「父ちちの無限性」ということです。

「神かみさまの無限性むげんせいをもらえ」

ということ。



「いれどいり」

なんていうところはない。質的に無限性をもっている。さつきの三日月みたいなものです。満月を抱いているような三日月には無限性がある。無限性をもって、あなた方は仕事をしてくださいよ。「これでいい」なんていうところはありはしない。「完成した」と思ったら、お終い。完成はお終いだ。私は、完成は嫌いだ。未成交響楽がいい。

西郷南洲が、

「俺は、金も要らず、名誉も要らず、生命も要らない。始末のわるい男だ」

と自分で言っている。南洲というのはいはり凄惨な魂だ。これがやはり棄身の態勢です。ああいう凄惨な魂の伝記を読むと——そこらのいい加減な文学はダメだ——ああいう本当の人間の伝記は素晴らしい。

この頃の若い人は伝記を読んでいるかな。学校の先生たちがそういう指導をしなければダメだ。偉人をただ崇拜するのではない。偉大な人間の在り方から何かを学びとって、その人らしく生きていく。なにも英雄崇拜論ではない。カーライルが『ヒアローオアシップ』なんてのを書いたけれども、カーライルだってそんな気持ちで書いているのではない。あの中のダンテ論はとても素晴らしい。

●新しき歌を歌わん

故里ふるさとを想う歌がお互いに戦争を止めさせて仲良くさせた。これが『ビルマの豎琴』という話です。私たちはもうひとつ別な故里をもっている。言うまでもなく、霊界れいがいです。魂の帰り往くところ、永遠の世界です。キリストは私たちに永遠の生命をくださった。だから、死なない。いわゆる「死」なんていうものはなにも死ではない。

いわゆる死の関門を通ると、向こうはもつと凄惨な現実が待っている。時々、夢で私は見るからね、霊界の次元を。それは、パラダイスはきれいだよ、本当にきれいだ。いわゆる死の少し前に、そういうパラダイスの幻影を見させられる人がある。そして、死なないで帰ってきて、

「いやあ、素晴らしい景色を見ってきました」

なんて。これは本当にそうなんだ。だから、「極楽」だとか「天国」だとかというのは決していい加減な言葉ではない。

天界のキリストの周りにはどういうひとがいますか。地上でもって一番涙を流したひと、苦勞のために迫害にあったひとたち、そういうひとたちが一番近くにいる。いわゆる地上の偉人なんていう者はずつと後の方だ。私の描く天国はダンテと違う。

生まれの故里ばかりでなくて、天界の故里、それを両方とも歌えるようなひと。私は天界の故里の方をむしろ言いたいわけです。そういう意味において、魂を慰め励ます歌がいかに大事であるかということなのです。



「新しき歌を歌わん」

というのは、そのことです。聖書にも出ている。

あなた方自身が、それぞれの生活そのものが歌である。天国を現じている生活が歌なんです。それが天国的な歌なんです。天使たちが作曲しているよ、そのひとの在り方で。存在そのものが讚美の歌です。愛の歌、讚美の歌。どんな境遇にあらうが、何に出っ会えうが、キリストを讚美せざるを得ない。いかなる時代のいかなる運命環境にでつくわそうが、感謝と讚美を貫いていくような魂、これが本当の勝利している魂です。キリストが最も喜びたもうところの、

「われ汝を愛する」

という魂です。決して行き詰まらない。決してしよげない。艱難に遭えば遇うほど、人に虐待されればされるほど、逆に神讚美の姿になっていく。

「ああ不思議なひとだなあ」

と。完全に現実に打ち勝っているひとです。本当の現実を体現しているひとです。

我々はそのような存在でありたいわけです。いくら冗談言ったって何だつていいよ、けれども、その本質はそうだということ。冗談言おうが、バカ言おうが、そんなことは構わない。けれども、その奥にはこういう響きがあるぞと。冗談で終始しているような薄っぺらい人間だったら、それはしょうがない。

身体の調子が悪かったり何かすると、私は按手してあげるけれども、私の按手なんか要らない。

「主さま、あなたの生命がこの中で動いてください」

と、キリストをいただいてごらん。局所的なものはそのから治っていくから。局部にただ手を按いたって本当はダメなんだ。キリストの生命が入ってきて、グーツと流れていけば、悪い所が治ってしまう。イエス・キリストは最大の薬です。そこの薬品なんかとてもかなわない。キリストの生命が一番凄い薬だ、キリストは最大の医者だ。だから、心配いりません。死人を甦らせるひとだから。

とにかく、心配や疑いが一番いかん。心配したり疑ったりするのが一番いかん。「信ずる」というのは100%のことなんです。

「98%は信じていますが、2%はちよつと……」

なんて、何を言っているか。100%です。我々はそのようなキリストを生きているひとです。

「我々はいわゆるクリスチャンではありません。キリスト一点張りの凡人ただひとです」

と、それでいい。そういう姿が神讚美なんです。人を本当に救うような力を持たないで何が神讚美か、ということなんです。

ベートーヴェンの音楽はいつまでも人々を慰め励まします。日本にはその根底がないものだから、もの凄いものが出てこない。とにかく、我々は一人ひとり、特殊な使命を負っ



ていますから、福音の体現者として大いに遠慮なしにキリストを現していつてくださいます。ありがとうございます。

● 祈り

祈ります。

主さま、御前に平伏します。この拙き者の口を通してあなたの驚くべき真理の一端を告白させてくださり、ありがとうございます。兄弟姉妹たちと、語るも聞くも同じこと、この福音の驚くべき世界に、御霊・御言によつて導かれ、ここまでやってきました。昨日からただ今に至るまで、あなたの御導きを、その聖霊の御働き、十字架の土台におけるところの聖霊の御働きを感謝いたします。私たちはいわゆるクリスチャンではありません。どうぞ、本当のキリストの証びととして、一人ひとりのつぴきならない体現をさせてくださるようお願い奉ります。そのことのできることを信じて、聖名を讃え奉ります。この兄弟姉妹たちは大事な一人ひとりです。この一人ひとりを通して、その近所の方々またお家の方々に、この福音のキリストのみ力を、み光を、御生命を、言わず語らずのうちに広めていくことができますことを信じて、聖名を讃え奉ります。どうぞ、ここにいらつしやつた方々のそれぞれの集いを、あなたが深く聖名の故に顧みてくださり、それぞれにふさわしき展開をいよいよよさせてくださるようお願い奉ります。

京都におけるところのこのような集いを、O兄弟の主にある愛を中心として展開させてくださったことを感謝いたします。

尽くしませんが、心からの感謝と讚美、兄弟姉妹たちの感謝と讚美と共に、主イエス・キリストの聖名に在つて捧げ奉る。アーメン。

